

長岡市埋蔵文化財調査報告書

第47集



2007

財団法人 長岡市埋蔵文化財センター

長岡京市埋蔵文化財調査報告書

第47集

2007

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター



(1) 蓋形埴輪の立ち飾り（表と裏）



(2) 落ち込みの崖面と堆積層（北西から）

序 文

長岡市は、10年の都であった長岡京跡をはじめとし、古墳や寺社などといった歴史のロマンが息づく文化遺産が数多く所在しています。そのうち市域の北部にあたる今里地区から井ノ内地区にかけては、乙訓寺や「乙訓坐火雷神社」の伝承を有する角宮神社など郡名を冠する由緒のある寺社が所在しており、古くから乙訓地域の中心地的な位置を占めております。

乙訓寺の南側を東西に走る都市計画道路今里長法寺線では、道路の拡幅などの整備事業が計画され、平成8年度よりそれに伴う発掘調査が実施されてきました。本書は、平成16年度に行われた長岡京跡右京第839次調査と、最後の調査にあたる平成18年度実施の長岡京跡右京第898次調査に関係するものをまとめたものです。

両調査においては、道路と平行するように伸びる開析谷とその内部に堆積する土層などを確認し、各土層中からは弥生時代、古墳時代、中世、近世など各時代にわたる遺物が出土するなど、大きな成果を得ることができました。

最後になりましたが、現地調査から整理作業に至まで様々なご指導・ご協力いただきました関係各機関、関係者の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、今後なお一層のご支援を賜りますようよろしくお願い申しあげます。

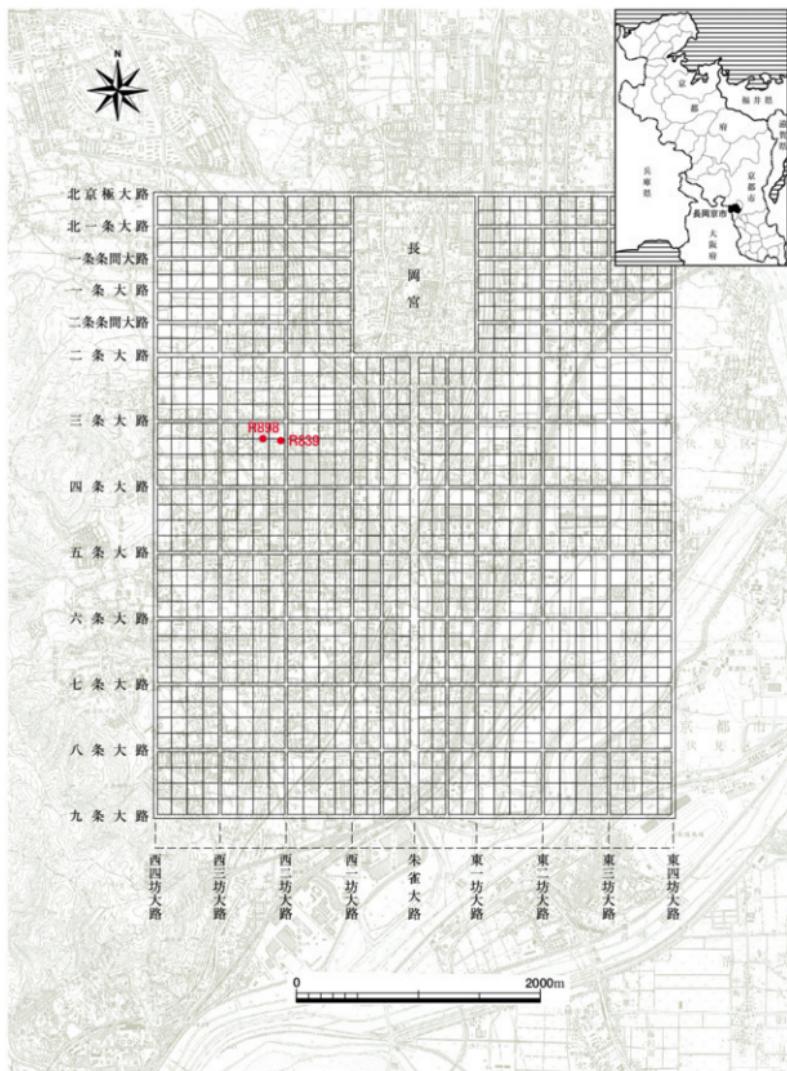
平成19年6月

財団法人 長岡市埋蔵文化財センター

理事長 芦田富男

凡　　例

1. 本書は、平成16年度と平成18年度に長岡京市今里二丁目地内で実施した都市計画道路今里長法寺線（第2工区）整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。
2. 調査は、長岡京市広域道路課の委託を受け、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センター調査係主査原秀樹が担当した。
3. 長岡京跡の調査次数は、各遺跡の調査回数を示し、長岡京跡では右京城と左京城に分けて通算したものである。調査地区名は、基本的に京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。
4. 長岡京の条坊名称は、山中章『古代条坊制論』『考古学研究』第38巻第4号の復原に従った。
5. 本書で使用する地形区分は、特に断らない限り『長岡京市域地形分類図』『長岡京市史』資料編一（1991年）によった。
6. 本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集（1985年）に従って略記した。
7. 本書において使用している遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数+番号であるが、報告によっては煩雑を避けるため調査次数を省略している。「SD01」などの場合は、調査次数を冠した「SD00001」が正式な番号である。
8. 本書で使用している国土座標値は、旧座標系の第VI系によっている。
9. 本書で用いた土層の色調は、新版標準土色帖（1998年版）によった。
10. 遺物写真は、（財）京都市埋蔵文化財研究所に撮影を依頼した。
11. 右京第898次調査の図面作成は、（株）文化財サービスに依頼した。
12. 本書の執筆と編集は、原が担当した。



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

本文 目 次

序 文	i
凡 例	ii
第1章 はじめに	1
第2章 長岡京跡右京第839次（7 A N I H N - 6 地区）調査概要	3
1 調査経過	3
2 検出遺構	3
3 出土遺物	5
4 まとめ	7
第3章 長岡京跡右京第898次（7 A N I H N - 8 地区）調査概要	9
1 調査経過	9
2 検出遺構	9
3 出土遺物	14
4 まとめ	20

*表紙カット 右京第898次調査出土の土師器 壵

図 版 目 次

- 卷頭図版 (1) 蓋形埴輪の立ち飾り（表と裏）
 (2) 落ち込みの崖面と堆積層（北西から）

長岡京跡右京第839次調査

- 図版1 調査地全景（南東から）
 図版2 (1) 調査地全景（南西から）
 (2) 流路の断面（西から）

長岡京跡右京第898次調査

- 図版3 (1) 調査地近景（北東から）
 (2) 調査地近景（西から）
 (3) 1トレンチ調査前の状況（西から）
 (4) 2トレンチ調査前の状況（東から）
 (5) 2トレンチ作業風景（東から）
 図版4 (1) 1トレンチ全景（西から）
 (2) 1トレンチ全景（東から）
 図版5 (1) 1トレンチ落ち込みの崖面（北から）
 (2) 1トレンチ落ち込みの崖面（北東から）
 (3) 2トレンチ砂礫層の検出状況（西から）
 (4) 2トレンチ砂礫層の検出状況（東から）
 図版6 (1) 2トレンチ完掘状況（西から）
 (2) 2トレンチ完掘状況（東から）
 (3) 2トレンチ南壁（北東から）
 (4) 2トレンチ南壁（北西から）
 図版7 (1) 2トレンチ落ち込みの崖面と堆積層（西から）
 (2) 2トレンチ落ち込みの崖面と堆積層（北西から）
 図版8 (1) 2トレンチ落ち込みの断面（北東から）
 (2) 2トレンチ落ち込みの掘り下げ作業（北東から）
 (3) 3トレンチ全景（北東から）
 (4) 3トレンチ落ち込みの崖面（北から）
 図版9 落ち込み出土の土師器と須恵器

図版10 (1) 落ち込み出土の弥生土器

(2) 同古墳時代の土師器

図版11 (1) 落ち込み出土の古墳時代の須恵器

(2) 同須恵器壺

図版12 (1) 落ち込み出土の埴輪

(2) 同石器

(3) 同江戸時代の土師器皿と土師質椀

挿 図 目 次

第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)	iii
第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第3図 掘り下げ前の状況 (北西から)	3
第4図 調査区平面図・土層図 (1/100)	4
第5図 流路跡土層図 (1/40)	5
第6図 2トレンチ全景 (南から)	5
第7図 2トレンチ断面 (東から)	5
第8図 出土遺物実測図 (1/4)	6
第9図 調査地遠景 (西から)	9
第10図 1トレンチ土層図 (1/80)	10
第11図 検出遺構図 (1/100)	11
第12図 2トレンチ土層図 (1/80)	13
第13図 3トレンチ土層図 (1/80)	14
第14図 落ち込みS X02出土土器実測図-1 (1/4)	14
第15図 落ち込みS X02出土土器実測図-2 (1/4)	15
第16図 落ち込みS X02出土土器実測図-3 (1/4)	17
第17図 落ち込み出土土器実測図-4 (1/4)	18
第18図 落ち込み出土土器実測図-5 (1/4)	18
第19図 落ち込みS X02出土埴輪実測図 (1/4)	18
第20図 落ち込みS X02出土石器実測図 (1/2)	19
第21図 調査地周辺の地形条件と条坊想定図 (1/2000)	21

付 表 目 次

付表-1 報告書抄録	22
------------------	----

第1章 はじめに

本報告は、平成16年度に実施した右京第839次調査と平成18年度に実施した右京第898次調査の概要報告である。調査は、整備された外環状線（府道西京高槻線）と旧道が交差する五差路の交差点から西方の都市計画街路石見淀線とを結ぶ道路を拡幅するために計画された都市計画道路今里長法寺線（第2工区）の道路整備に伴う事前の発掘調査として実施したものである。すでに同工区では、平成13年に右京第716次調査⁽¹⁾、同14年に右京第732次調査⁽²⁾と右京第740次調査⁽³⁾、同15年に右京第777次調査、右京第784次調査⁽⁴⁾と右京第792次調査⁽⁵⁾が行われており、今回報告する2年度分の調査で一連の調査報告が終了する。

調査地周辺は、緩やかに西から東へ傾斜しており、乙訓寺の表門に通じる南北道付近から外環状線の交差点まで現在の道路下には風呂川が暗渠となって流れている。現在の川筋は開析谷の名残りであり、北と南には低位段丘が広がっている。今回報告する2地点のうち、右京第839次調査地は開析谷を下って氾濫原に出た段丘裾付近に位置する。一方の右京第898次調査地は、乙訓寺表門の南側に残る旧家の北端にあたっており、北側の暗渠化した道路面からみるとかなり高く残っている。周辺が道路に合わせて削られた中で、当地は旧家の敷地として昔の様子をどこかに留めているように見える。

上記の各調査地では、開析谷に含まれる地形条件に影響されたか、右京第732次調査地から東は安定した造構面は少なく流路堆積層や湧水に直面することが多い。しかしながら、流路に流された遺物や、水辺から出土する遺物には、周辺での遺跡のあり方を再考させる資料となる場合が



ある。一連の調査においては、前期古墳の副葬品である車輪石やひれ付円筒埴輪などの出土と、平安時代以前と考えられる縪錢の出土が注目される。乙調寺が創建される以前に古墳が存在した可能性がより具体的になり、古代から中世、近世に連綿と続く地域の歴史が埋もれた砂礫の中から明らかとなってきた。

- 注1) 中島皆夫「右京第716次調査概要」「長岡京市センター報告書」第23集 2001年
2) 中島皆夫「右京第732次調査概要」「長岡京市センター報告書」第27集 2003年
3) 中島皆夫「右京第740次調査概要」「長岡京市センター報告書」第27集 2003年
4) 原 秀樹「右京第777次調査概要」「長岡京市センター報告書」第37集 2004年
5) 原 秀樹「右京第784次調査概要」「長岡京市センター報告書」第37集 2004年
6) 原 秀樹「右京第792次調査概要」「長岡京市センター報告書」第37集 2004年

第2章 長岡京跡右京第839次（7 A N I H N - 6 地区）調査概要

—右京四条三坊二町、今里遺跡—

1 調査経過

調査地は、外環状線（愛称名今里大通り）が東から北に折れた交差点の南西隅に位置する。北は東西に走る今里長法寺線の道路、東は今里地区内の生活道路と接しており、敷地内の南側は農協の今里集出荷場となっている。現在、今里長法寺線の道路下には風呂川が暗渠となって東流するが、交差点付近から再び外に出て段丘裾に沿って南東方向に流れる。調査対象地は、すでに今里集出荷場への水道管が埋設されており、調査中も搬出入の車両が通行できる道幅を確保する必要があることから、調査は2回に分けて行うこととなった。

発掘調査は、はじめに東側に1トレンチを設定し、終了後に西側に2トレンチを設定した。各トレンチの国土座標値（第VI座標系）は、1トレンチが $X = -118,477$ 、 $Y = -27,920$ 。2トレンチは、 $X = -118,477$ 、 $Y = -27,928$ である。

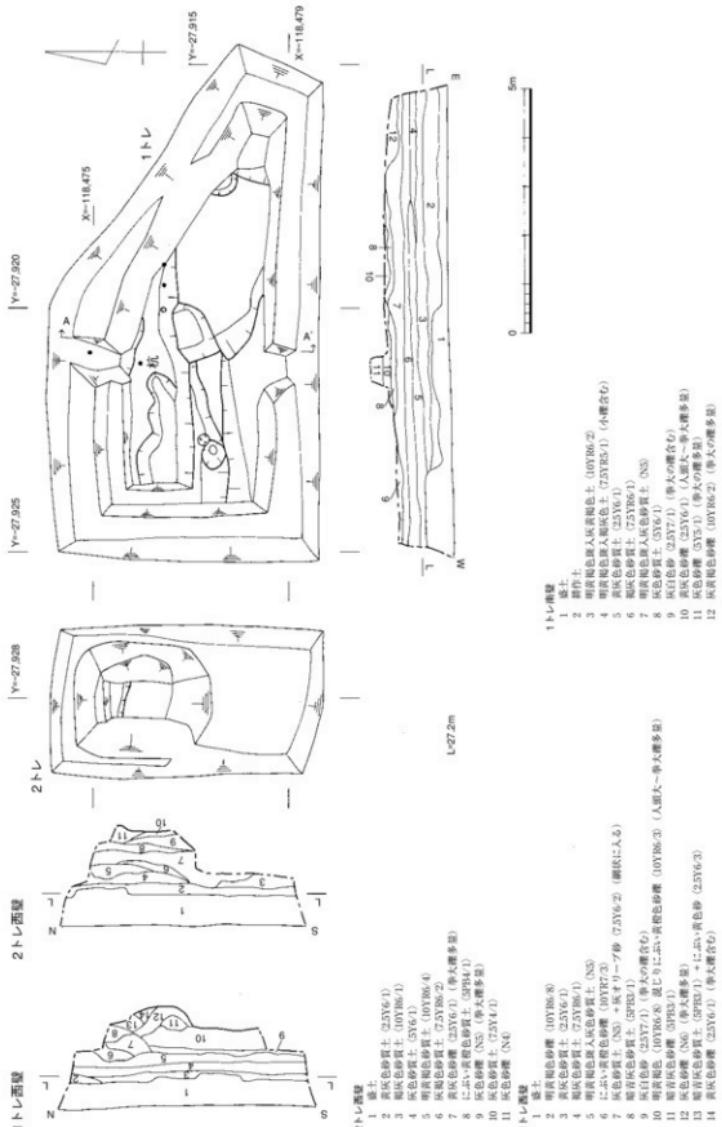
2 検出遺構

1トレンチ 東西の長さ10m、幅は歩道の関係から変則となり、最大5.5mから東側では2mと狭くなる。調査では、道路整地層、耕作土を除去した第3層上面で遺構検出を行なったが、やや輪郭が不明瞭なところがあり、さらに掘り下げを進めた。その結果、ほぼ水平に堆積する第3層から第6層は中世の遺物包含層であることがわかった。ようやく第7層において流路とみられる砂礫層とシルト層を確認し、ここからの掘り下げは壁面の崩落防止のため控えを取り段掘りを行った。流路の肩部は見つかっていないが、埋土は砂層と礫層が混在しており、こぶし大から人頭大までの石が多量に含まれる。地山は暗灰色系から黄色系の粘質土で、強い流れで抉られたような凸凹がみられる。北側の川底に向かって下がっており、底からは絶えず水が湧いていた。流路内は、弥生時代から平安時代の遺物が混在しており、大半が摩滅した小片であることから上流から流されたものと考えられる。

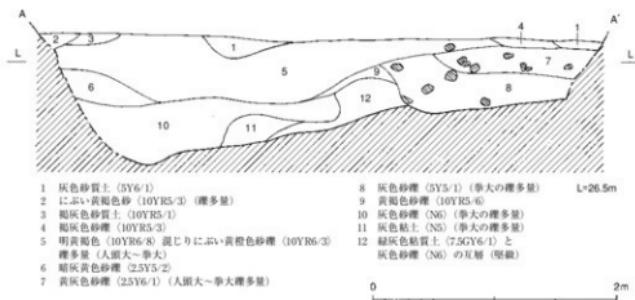
2トレンチ 6m×11mの長方形を設定する。流路底まで深いことから段掘りを行ない、北側で底面を確認することとした。1トレンチと違い耕作土が無く、中世の遺物包含層も薄くなっているが、砂礫層にはこぶし大程度の石が多量に含まれる。底からは絶えず水が湧いていた。古墳時代から長岡京期の遺物が出土している。



第3図 挖り下げ前の状況（北西から）



第4図 調査区平面図・土層図 (1/100)



第5図 流路跡土層図 (1/40)

3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理コンテナ3箱分である。流路から出土した遺物は、摩滅した小片が多く図示できるものは数少ないが、各時代の土器類が混在する。主なものには、弥生土器(1)、古墳時代から飛鳥時代の土師器(2)、須恵器(3~7)、平安時代の土師器(8~10)、須恵器(11~25・37~39)、緑釉陶器と同じ調整を施した須恵器(26~32)、緑釉陶器(33~36)などがある(第8図)。

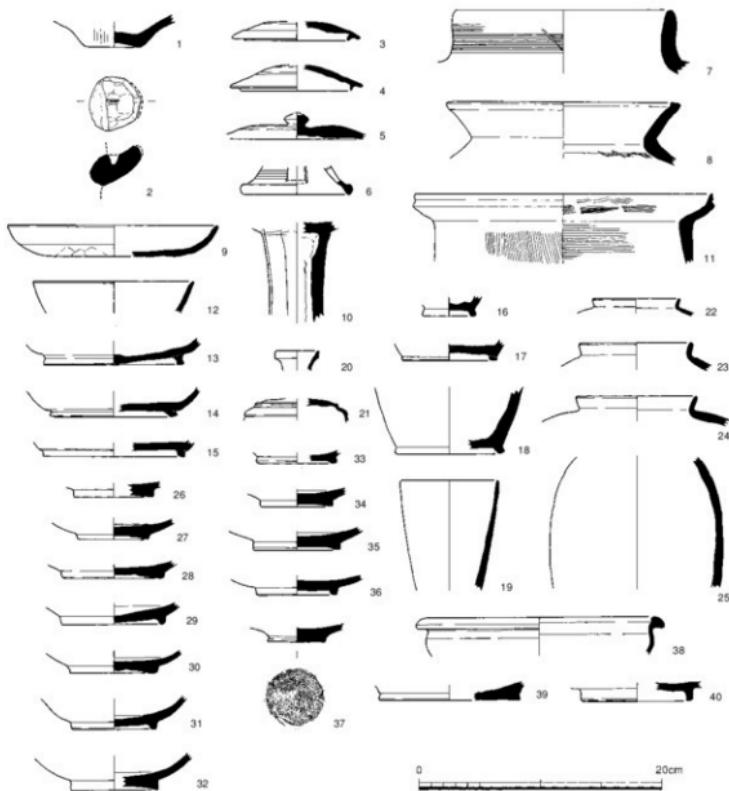
1は、弥生土器の壺底部。上げ底から大きく開く部外面には叩き目が残る。弥生時代後期。
 2は、土師器壺の把手。上面中央に長さ0.8cm前後の切り込みを入れる。他の出土遺物や隣接調査の類例からみて、飛鳥時代か。3・4は、須恵器の杯G蓋。口径は、3が10.6cm、4が12cm。4の天井部にヘラ描きの直線が記される。5は、宝珠つまみが付く須恵器の杯B蓋。天井部には円弧状に粘土が貼り付いており、その内側と外側とでは器表面の色調が異なる。焼成時の重ね焼きによるものか。6は、須恵器高杯の脚部。透かしの数は小片のため不明。外面にカキ目を施す。古墳時代の伝統的な形態。7は、須恵器壺。口径18.4cm。直立する口縁部外面にヘラ描きの直線を記す。カキ目調整。8は、土師器皿。口径17.2cm。底部ヘラ削り調整。器表面が黒ずむのは、使用時のものとみられる。9は、土師器高杯の柱状部。面取りは4面が残存する。10は、土師器壺。口径24.7cm。胎土に



第6図 2トレンチ全景 (南から)



第7図 2トレンチ断面 (東から)



第8図 出土遺物実測図(1/4)

砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。11は、須恵器壺。口径19.2cm。口縁部内面に自然孔が付着する。12は、須恵器杯A。口径13.2cm。胎土は軟質で灰白色を呈する。口縁端部の内外面は黒色化しており、外面は使用時の煤が付着する。13~16は、須恵器杯B。13と14は、高台が外側に踏ん張る形態で、体部は高台からやや離れて立ち上がる。15・16は、直立する高台から体部が直線的に延びる。17は、須恵器壺M。底部中央に糸切り痕跡が残る。貼付け高台。18は、須恵器壺L。色調は、外面が暗灰黄色(2.5Y5/2)、内面と底部は褐灰色(10YR5/1)。底部は、丁寧なナデ調整を施す。19は、須恵器碗A。口径8.2cm、器高9cm残存。口縁部から底部に直線的にすぼまる形態。20は、須恵器壺M。口径3.6cm。口縁部外面に明瞭な端面をもつ。21は、須恵器の蓋と考えられるが、類例不足のため詳細は不明である。金属器を模倣したものか。22~24は、須恵器壺A。22は、口径7.1cm。胎土は精良で、微砂粒は目立たない。色調は灰白色。器壁も均質で

かなり薄手である。23は、口径9.4cm。直立する口縁部外面は、暗青灰色から褐色系であるが、体部は陰灰で灰白色となる。蓋が被さった痕跡は残らない。24は、口径9.4cm。直立する口縁部から1cmほど環状に蓋が被さった痕跡が残る。体部外面には自然釉が付着する。25は、須恵器で長胴形の壺か。焼成は軟質で、色調は灰白色を呈する。26~32は、削り出し高台の須恵器壺。形状から円盤状のもの（26・32）、いわゆる蛇の目高台のもの（27・28・30）、輪高台のもの（29・31）がある。27は、黄橙色の軟質焼成。全体が摩滅して調整は不明であるが、本来は施釉したものであろう。他の個体も若干の精粗はあるが、見込みと高台内、体部外面をヘラミガキ調整する。31は、見込み部分が一段凹む。32は、内面に重ね焼きの痕跡が残る。33~36の高台は、輪高台のもの（33・35・36）と、円盤状のもの（34）があり、前者は全面施釉する。後者は、部分的に釉をこすり付けるように施釉する。37は、須恵器の耳皿か椀か。底部は糸切り未調整。円盤状の高台には、焼成後に縁を細かく打ち欠いたような痕跡が残る。38は、鉢。口径20.4cm。胎土に横縞状の平行する筋文様が目立つ。玉縁状の特徴的な口縁部から亀岡窯産である。⁽¹¹⁾39は、須恵器壺。円盤状の高台で、底部は糸切り未調整。

この他の遺物には、内面または両面に炭素を吸着させた黒色土器壺、縁釉陶器の火舎、水注、瓦器椀、埴輪、製塙土器、瓦、碁石などがある。大まかな傾向として、本地点では飛鳥時代の遺物と平安時代の遺物が多く出土しており、他の時代の遺物は希薄であった。

4 まとめ

平成16年度に実施した本調査地では、現在は暗渠となっている風呂川の流路跡を確認することができた。対面する北岸の右京第777次調査の1トレンチでは、幅3m~7mの蛇行する流路S D06が平安時代前期に埋没した状況を確認しており、開析谷から下った氾濫原の開口部付近では葉脈状の小流路となっていたものとみられる。本地点では、中世に耕地化された以降は現在の風呂川の流路に落ち着いたと考えられる。

一方、流路の遺物は弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、長岡京期から平安時代、中世など各時代のものが混在しているが、特に本地点では平安時代前半期の遺物が多い。流された遺物は、上流域の遺跡のあり方を知る重要な手掛かりとなる。

これまで乙調寺東方では、右京第12次調査、右京第582次調査で9世紀中葉から10世紀前葉に至る平安時代の陰刻花文陶器を含む縁釉陶器と灰釉陶器、輸入陶磁器が出土し、右京第407次調査では甕据え付け穴を持つ建物などの特筆される遺跡がみつかっている。もとより乙調寺は、郡名を冠する寺院であり、昭和41年の調査では講堂や僧坊などが確認された大寺院である。平安時代の乙調寺については、承平元（931）年に没した寛平法皇（宇多法皇）の御在所であった可能性が指摘されている。中世の史料や江戸時代の地誌に山城法皇寺と呼ばれた由来はこれによる。平安時代前半期の農村地帯にあって、中国産の輸入陶磁器や縁釉陶器、灰釉陶器を搬入することが可能な遺跡は官衙関係や寺院跡などに限られていることから、本地点の遺物も乙調寺や寛平法皇の御在所と関連づけて考えるのが妥当であろう。

- 注1) 水谷寿克、石井清司他「篠跡群Ⅰ」「京都府センター報告書」第2冊 1984年
水谷寿克、岡崎研一他「篠跡群Ⅱ」「京都府センター報告書」第11冊 1989年
- 2) 原 秀樹「長岡京跡右京第777次調査概要」「長岡京市センター報告書」第37集 2004年
- 3) 高橋美久仁他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」「京都府概報」(1980-2) 1980年
- 4) 岩崎 誠「長岡京跡右京第582次調査概要」「長岡京市報告書」第38冊 1998年
「長岡京跡右京第582次調査概要」「長岡京市報告書」第39冊 1999年
- 5) 中島皆夫「右京第407次調査略報」「長岡京市センター年報」平成4年度 1994年
- 6) 吉本 俊「乙調寺発掘調査概要」「京都府概報」1967年
- 7) 百瀬ちどり「乙調寺とその周辺における奈良～平安時代の検出遺構」「長岡京市報告書」
第12冊 1984年

第3章 長岡京跡右京第898次（7 A N I H N - 8 地区）調査概要

—右京四条三坊八町、今里遺跡—

1 調査経過

調査地は、旧家の土蔵と倉庫が建つ樹木の生い茂った屋敷地の北端にあたり、石垣や土塀で囲まれた中は周囲の道路より一段高くなっている。調査対象地は、母屋から北の道路へ出る南北通路の西側と東側に分かれる。西側は、東西方向の石垣で南が高く北が一段低くなっている。通路の東側は全体に盛土されており、外側は高い壁が立ち上がる。

発掘調査は、既存の建物と樹木を撤去した後に西から3箇所のトレンチを設定した。1トレンチは、母屋から続く同じ平坦面にあり、西端で北に折れて石垣を横断する。2トレンチは、当初石垣の北側に設定したが、下層から古墳時代と弥生時代を中心とする多量の土器が出土したことから後に拡張を行った。3トレンチは、盛土が厚く深いため段掘りを行った。各トレンチの国土座標値（第VI座標系）は、1トレンチが $X=-118,477$ 、 $Y=-28,115$ 。2トレンチは、 $X=-118,475$ 、 $Y=-28,102$ 、3トレンチは、 $X=-118,475$ 、 $Y=-28,088$ である。

2 検出遺構

1トレンチ 東西方向に長さ15m、幅3mあり、西端で北に折れて石垣を断ち割る。通路と踏み石などが残る表土の下層は、植木の根が張り、所々に砂や小さな礫を含む層が不規則に堆積しており、地山面まで現代の生活痕跡で覆われている。遺構は、黄褐色系の地山面から検出されたが、植木の掘り込みや擾乱などがあり遺構は極めて少ない。南北部分については、緩やかな傾斜面の中程に4個積み上げた石垣とその掘形があり、北端は急に落ち込んでいる。主な遺構について以下に列記する。

溝S D01 東西方向の素掘り溝。幅0.3m～0.5m、深さ約0.1m。土師器小片が出土した。

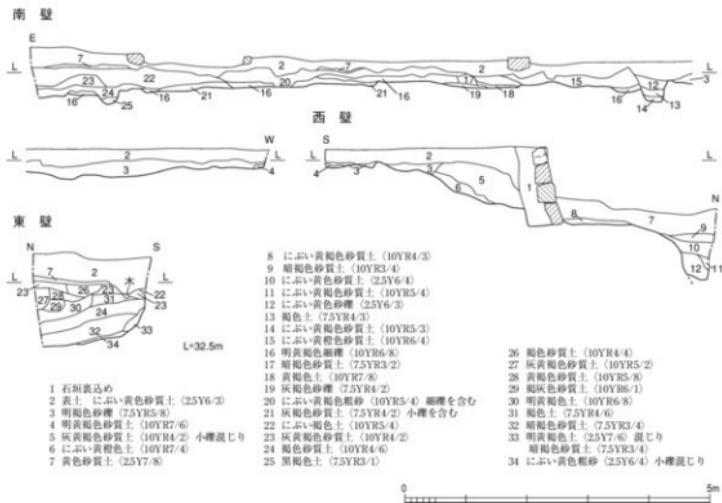
落ち込み S X02 段丘礫層が露出する堅い地山が北側へ急傾斜で落ち込む。東西に長さ2m、深さ約0.7mまで掘り下げたが底はさらに深い。今回の掘削範囲内では埋め土に現代の遺物が含まれていた。遺物は出土していない。

溝 S D03 南北方向の素掘り溝。幅0.4m～0.6m、深さ約0.4m。棟瓦が投棄されていた。

溝 S D04 東西方向の素掘り溝で、溝 S D03から東に延びる。幅約0.5m、深さ約0.1m。途中から擾乱に含まれる。遺物は出土していない。



第9図 調査地遠景（西から）



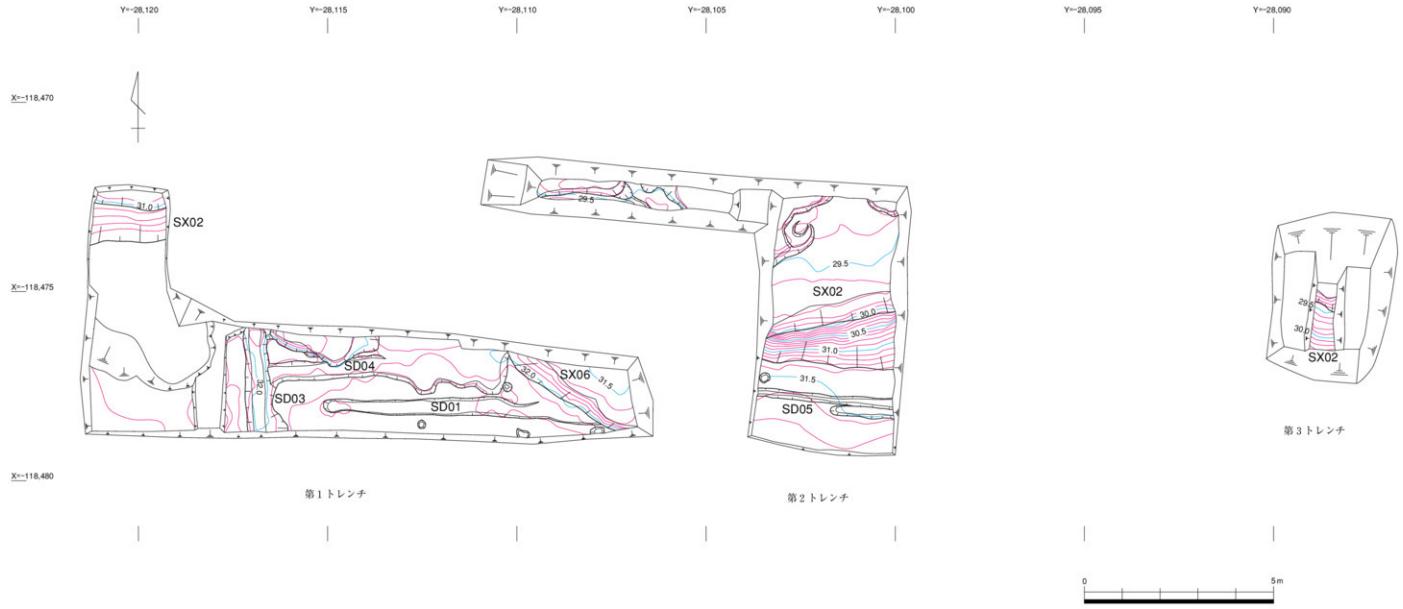
第10図 1 トレンチ土層図 (1/80)

落ち込み S X06 トレンチ東端にあり、全体の形状は不明。北西から南東方向に直線的に延びる輪郭は長さ3.5m、深さは約0.8m。底面の標高は、後述する2トレンチの段丘面と同じであることから、本遺構は落ち込み S X02より高位の肩部と想定される。中世の土師器、陶器などが出土した。

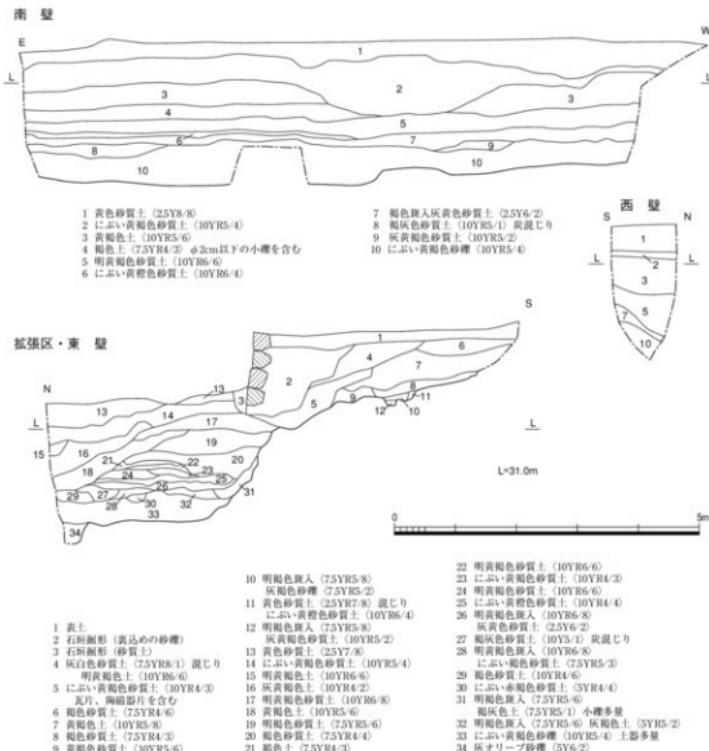
2トレンチ 敷地内の石垣と北側の道路との間は約5mあるが、安全面から一定の控えを取る必要があり、なおかつ本地点は盛土が厚く深いことが予想されたため、約1.5m幅で東西方向に11mのトレンチを設定した。しかし、本トレンチでは予想外に多量の遺物が出土したことから、東側を拡張して遺物と遺構のあり方を追求することとなった。

拡張後の2トレンチは、敷地内の石垣を横断して東西4m、南北7mとした。1トレンチと同様に、南側の段丘部では盛土の下は地山面となっており、遺構はわずかに溝と柱穴が検出されただけであった。今回の調査では、北に向かって礫を多く含む段丘層が急傾斜で落ち込む状況が初めて明らかとなり、拡張前に多量の遺物が出土した堆積層は、段丘部から開析谷の落ち込みに流れ込んだものと判明した。主な遺構については、以下に列記する。

落ち込み S X02 長さ3.5mにわたって東西方向の肩部を検出する。下端は南西から北東方向に斜めを向き、底面はやや凸凹があり、北端付近でさらに北へ落ち込んでいく。層位（第12図南壁）は、現代の盛土を除去した第3層と第4層から江戸時代後期を中心とする陶磁器類と棟瓦が多数出土した。以下、第5層から第9層からは長岡京期・平安時代初頭を下限とする飛鳥、古墳、弥生各時代の遺物が多量に出土した。最下層の第9層は砂礫層となっており、底から絶えず水が湧く状態であった。底面は不整形な凹みが所々にあり、シルトや砂が堆積する。流路が機能して



第11図 検出遺構図 (1/100)



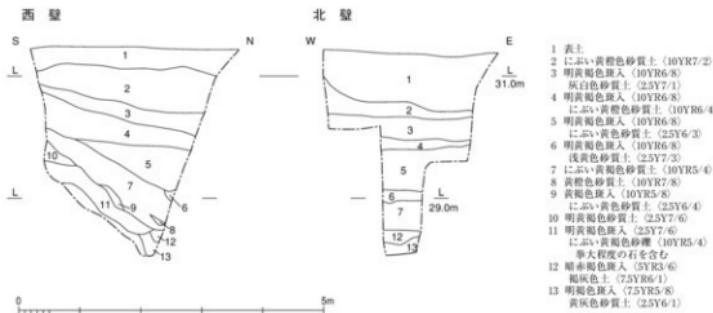
第12図 2トレンチ土層図 (1/80)

いた段階に形作られたのものであろう。

溝S D05 東西方向の素掘り溝。東半部では2本の溝が平行するが、南溝は途中で終息する。幅0.3m~0.5m、深さ約0.1m。土師器小片が出土した。1トレンチの落ち込みS X06の底面と標高が変わらないことから、一段下がった段丘面が広がっているようである。

柱穴 落ち込みS X02と溝S D05の間にある直径0.3mの柱穴。遺物は出土していない。

3トレンチ 周囲の石垣上に新たに盛土を行っており、掘削は土置き場の確保と合わせて小面積にならざるを得なかつたため4m×3mの範囲で段掘りを行つた。表土の下は藪土に類似した盛土が最大2mほど堆積しており、旧表土とみられる第7層とこぶし大程度の石を含む第11層が約40°の急傾斜で北側へ落ち込んでいる(第13図)。掘削した最深部では水がしみ出している。遺物は中世の陶器片が出土した。

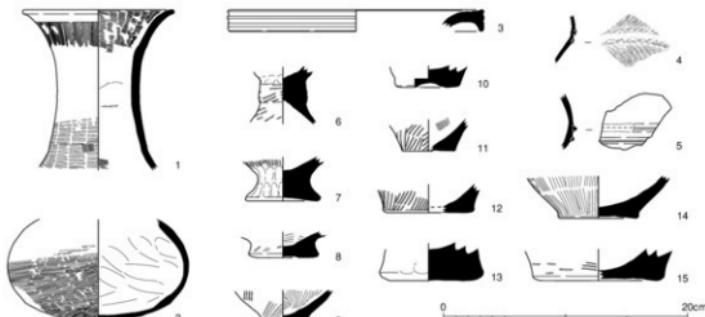


2 出土遺物

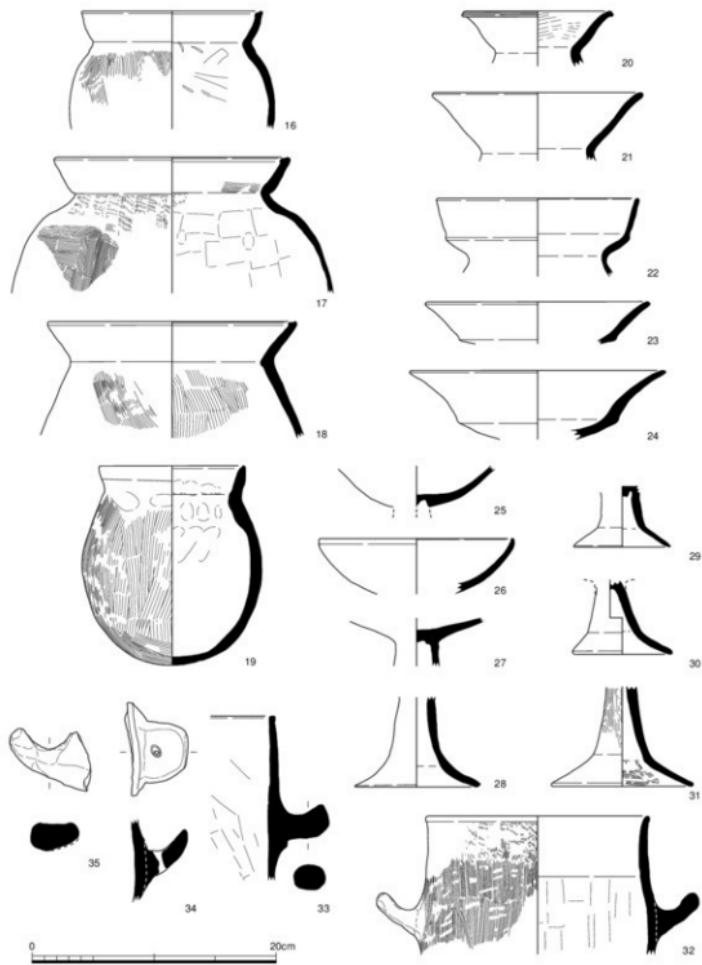
今回の調査で出土した遺物は、整理コンテナ9箱分である。大半は2トレンチの落ち込みS X 02の各層から出土したもので、他の遺物は小片かつ少量で図示できるものはなかった。以下、各時代の主な遺物について述べる。

落ち込み S X02出土土器 - 1 (第14図)

1～15は、弥生土器。1は、長頸壺。口縁部は外反する。外面は、口縁部付近をハケメ調整。頸部下半は叩き目を残す。口径12cm。2は、細頸壺。横に膨らむ体部と、小さな平底がつく。外面はヘラミガキ調整。3は、広口壺。口縁部端面は下方に拡張し、3条の凹線文を巡らせる。口縁部内面は櫛描列点文を施す。4・5は、手焙形土器の体部。2条の突帯を張り付ける。4は、下半をハケメあるいはヘラミガキ調整。上半は先の尖った刃物などで細かい斜格子文を描く。突帯は、列点文風に刺突する。器壁は薄く、丁寧なつくりである。6は、高杯。中実となる短い脚部外面に叩き目が残る。7は、鉢。低い脚台はナデ調整。外面は叩き目か。8～15は、壺・甕の



第14図 落ち込み S X02出土土器実測図 - 1 (1/4)



第15図 落ち込み S X02出土土器実測図－2 (1/4)

底部。外面は、叩きまたはハケメ調整。弥生時代後期。

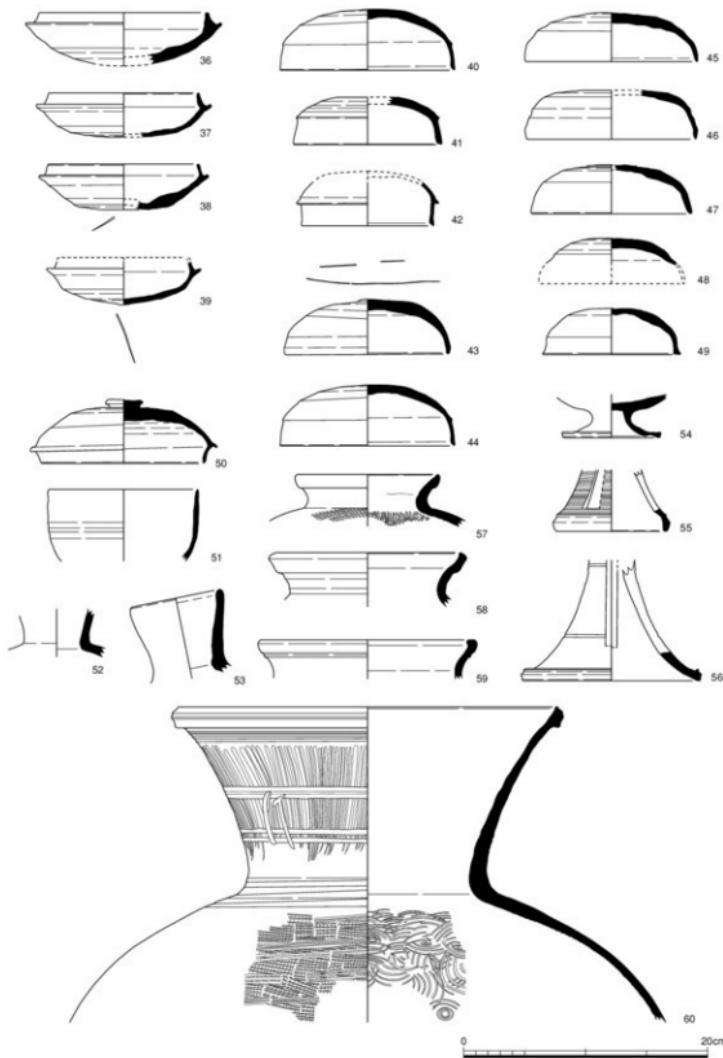
落ち込み S X02出土土器－2 (第15図)

16~35は、古墳時代の土器師。16~18は、口縁端部を肥厚させる壺。口径は、16が14.8cm。17が18.9cm。18が20.4cm。体部外面は、ハケメ調整。内面は、16と17がヘラ削り。18のハケメ調整は。外面と比べて内面が粗い。19は、完形品。口径12cm、器高16.3cm。外面はハケメ調整。

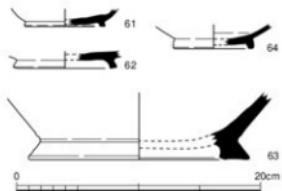
内面はナデ調整。最下層の砂礫内から出土。若干のひび割れがある程度で残り具合は良好。20は、口径12.4cm。外反する口縁端部はやや角張る。内面はヘラミガキか。21は、口径16.9cm。直線的に外反する口縁部をもつ。内外面とも摩滅する。22は、二重口縁の壺。口径16.4cm。23~26は、高杯の杯部。23と24は、杯部が屈曲して聞くもので、25と26は丸い椀形を呈する。口径は、23が18.4cm、24が21cm、26が16cm。27~31は、高杯の柱状部。摩滅しており調整が残るものは限られるが、中空の柱状部は、内面を横方向のヘラ削りを行うもの（27・31）、裾部内面と柱状部外面をハケメ調整するもの（31）がある。32~35は、両側に把手の付く壺か甕。32は、口径18.6cm。外面をハケメ調整。内面は口縁部下半をヘラ削り調整。33は、調整方法や胎土、色調が32と類似する。32・33の把手は、棒状で断面楕円形。34は、扁平な把手の中央に直径0.7cm前後の穴を貫通させる。各層に混在する土器は、おおむね布留式併行期（16~18、20~24）と飛鳥時代（19、25~26、32~35）に比定される。

落ち込み S X02出土土器－3（第16図）

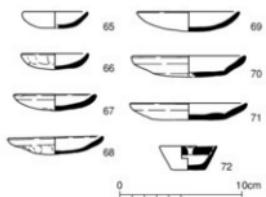
36~60は、古墳時代の須恵器。36~39は、受部と短い立ち上がりをもつ杯身。口径は、36は13.8cm。37は12.2cm。38は12.2cm。底部ヘラ削りは、境目が不明瞭なもの（36）、斜めに歪むものの（37）と、体部に棱線がつくもの（39）がある。36は、器壁が厚く、焼成も軟質。38は、小さな平底と体部の境が明瞭である。底部はヘラ切りする。38と39は、底部にヘラ記号をしるしている。^(図17)ヘラ削りの方向は逆時計回り。おおむね陶邑編年のT K209型式を中心とする時期に比定できる。40~50は、受部のある杯と組み合う蓋。この中で40~42は、古手に属する。口径は、40は、12.7cm。41は12.1cm。42は11.8cm。天井部と体部の境の稜は明瞭で、口径がまだ小振りとなっている。ヘラ削りの方向は、自然軸の付着や降灰で不明瞭であるが、40は時計回りである。41は、内面を仕上げナデしており、天井部のヘラ削りも丁寧である。おおむね陶邑編年のT K23型式～T K47型式に比定できる。43は、口径13.5cm。器高4.6cm。ヘラ切り後にナデ調整する。天井部に2本の平行するヘラ記号をしるしており、内面は最後に直線ナデを施す。44は、口径14.3cm。器高5cm。図示した中で最も大きく、天井部と体部の境の稜線はわずかに突出する。ヘラ削りの方向は、逆時計回り。45は、口径14.1cm。器高4cm。天井部と体部の境は凹む。ヘラ削りの方向は、逆時計回り。46は、口径13.8cm。天井部のヘラ削りには、外周のヘラ削りが内側の削りに被る部分があり、中心から外周にヘラ削りするものとは異なる。内面は最後に直線ナデを施す。天井部は偏平気味。47は、口径13.2cm。器高4cm。天井部はヘラ切り調整。内面は最後に直線ナデを施す。48は、天井部をヘラ削りした部分を全面にナデ調整する。あるいはヘラ切り後にナデ調整したものか。49は、口径12.2cm。器高3.8cm。自然軸が付着する。胎土は灰白色。口縁端部下端は平坦な面をもつ。50は、口径13.5cm。器高5.3cm。天井部に扁平なつまみが付く。外面は自然軸が付着し、つまみに接して破片が接着している。有蓋高杯であろうか。44・45・50については、おおむね陶邑編年のT K10型式を中心とする時期に、43・46~49は同T K209型式を中心とする時期に比定される。51は、台付きの椀。口径12.3cm。体部に2条の凹線をもつ。52は、提瓶。体部の肩部を穿孔して口頭部を接合する。53は、平瓶。斜めに接合された口頭部の



第16図 落ち込み S X02出土土器実測図 - 3 (1/4)

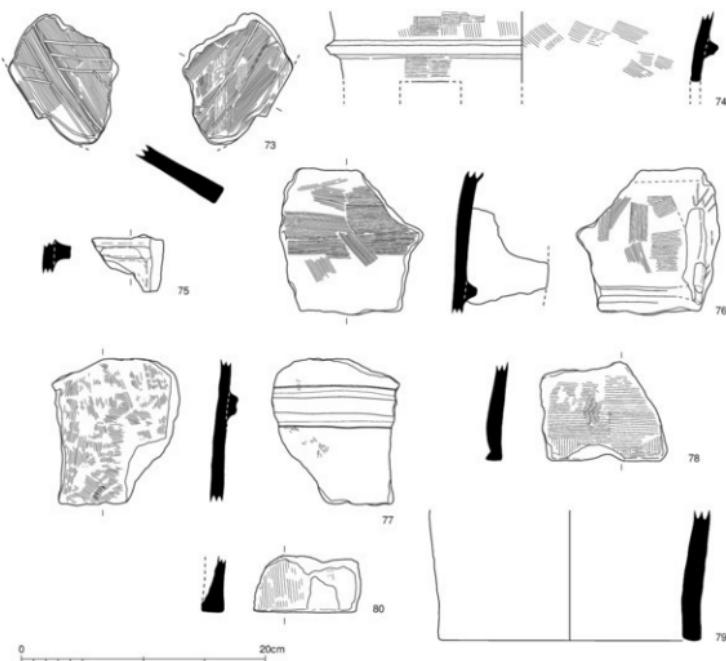


第17図 落ち込み出土土器実測図 - 4 (1/4)

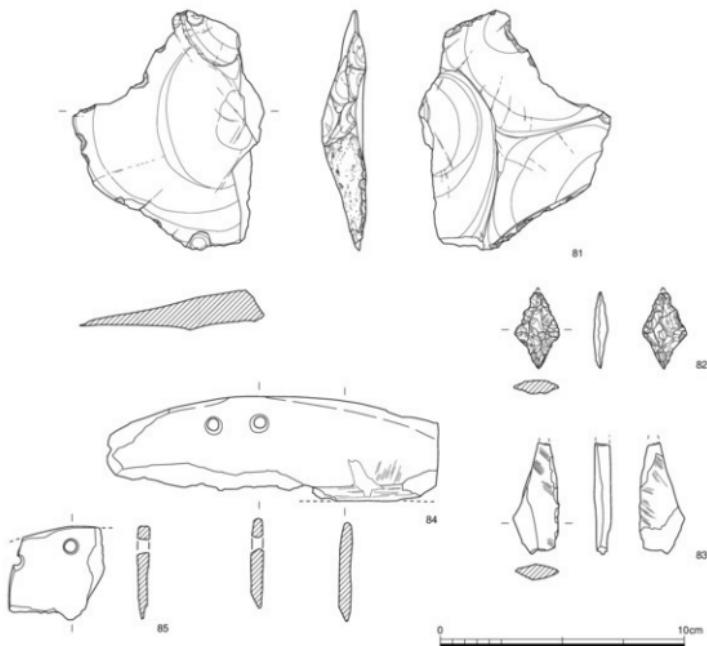


第18図 落ち込み出土土器実測図 - 5 (1/4)

内面下半と外面上半に自然釉が付着する。口径7.8cm。54は、台付きの椀か高杯。胎土は灰白色。焼成は軟質。摩滅しており調整は不明。55は、短脚の高杯。長方形の透かしが2個所残る。脚部はカキ目調整。56は、長脚の高杯。脚部中位に凹線を巡らせることから、長脚2段とみられる。透かしは2方向。57~60は、壺。口径は、57は11.8cm。58は16.4cm。59は18cm。60は31.8cm。体部外面は、57は平行叩き目か。60は、格子ふう叩き目。叩きの後、右上方向に線引き風に細いナテ調整を行なう。口頸部は、縱方向に粗い直線文と横に2本一組の凹線を2段加える。壺内面は同心円文の當て具痕。51~54・56~60についてには、おむね陶邑編年のT2090型式を中心とする時期に、55は同TK23型式~TK47型式を中心とする時期に比定される。



第19図 落ち込みS X 02出土埴輪実測図 (1/4)



第20図 落ち込み S X02出土石器実測図 (1/2)

落ち込み S X02出土土器－4（第17図）

61～64は、長岡京期から平安時代の須恵器と縁軸陶器。今回の調査では遺物は極めて少ない。61・62は、須恵器杯B。61は、高台径6.7cm。断面方形で小さく端正な高台。外面に自然釉が付着する。62は、高台径8.5cm。63は、須恵器壺。内外面に自然釉が付着する。猿投窯の製品とみられる。64は、縁軸陶器椀。高台内面を除いて全面に施釉する。削り出しの輪高台。このほか、火舎とみられる小片が出土している。

落ち込み S X02出土土器－5（第18図）

65～72は、江戸時代の土師器。皿の他に陶磁器類が若干出土したが、整理の都合から割愛した。65は、口径5.5cm。色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）。66は、口径5.6cm。器高1.3cm。楕円形に歪む。色調は橙色（7.5YR6/8）。67は、口径6.9cm。器高1.4cm。口縁端部に油煙が付着する。68は、口径7.9cm。器高1.5cm。色調は浅黄橙色（10YR8/3）。69は、口径8.5cm。器高1.6cm。色調は橙色（7.5YR6/8）。このうち68は、内面を右回りに一度期にナデ上げているが、66・67・69はナデ調整が粗い。70は、口径9.7cm。器高1.4cm。口縁端部に油煙が付着する。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）。内面に凹状圖線が巡る。71は、口径9.7cm。色調は橙色（7.5YR7/6）。内面に

凹状圓線が巡る。72は、灯明器。口径4.8cm。器高1.9cm。本体に灯心をくぐらせる穴をあけた薄い粘土板を渡す。このほか、図版12（3）に同様の小片があるが、103については胎土が精良で灰白色、焼成も土師器皿より硬質である。ロクロ成形による。口径6cm台。土師器皿は、調整方法と色調などに差異が認められる。今後資料の増加を待って整理したい。

落ち込みS X02出土埴輪（第19図）

73～80は、円筒埴輪、ヒレ付円筒埴輪、蓋形埴輪である。小片が多く個体の判別は難しい。73は、蓋形埴輪の立ち飾りとみられる。両面をハケメ調整の後、外縁の端面をヘラ削りする。両面に線刻があり、それぞれ文様は異なる。74は、透かし孔をもつ円筒埴輪。孔は長方形か。内面は斜めハケ、外面はタテハケ後にいわゆるB種ヨコハケを施す。75・76は、ヒレ付円筒埴輪。ヒレを貼り付ける部分に刻み目を入れている。76は、ヒレの上端と口縁端部の接合部分が剥がれて欠損するが、突帯から上端まで約8cmある。ヒレの厚さは先端で約1cm、端部は断面方形である。外面はタテハケとヨコハケが残る。内面はヨコハケ後に斜めハケを施す。ハケメは他のものより細かい。77は、タガの上と下にタガと平行する沈線を入れる。内面はタテハケ、外面は摩滅する。78～80は、底部。79は、底径21.5cm。調整は内外面とも摩滅しており不明。78は、底部内面の下端が打圧で凹む。外面はタテハケ後にヨコハケ、内面はナデ調整。80は、外面はタテハケ、内面は剥離する。図版12（1）の88は、タガの上部に方形の透かし孔がある。92と93は、黒斑が付着する。これらの埴輪は、川西編年のⅡ～Ⅲ期に比定される。

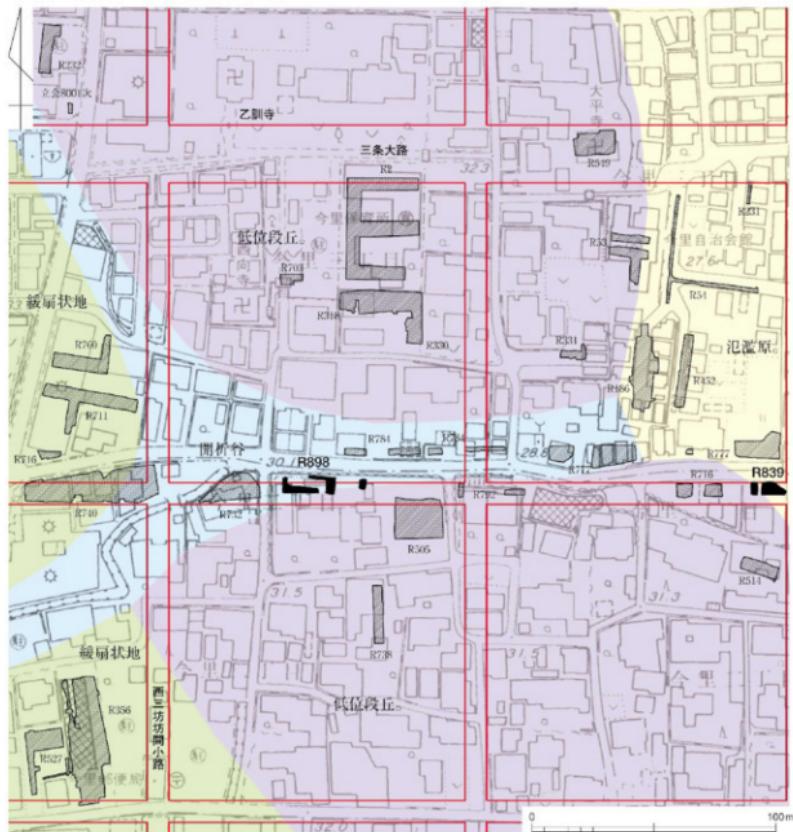
落ち込みS X02出土石器（第20図）

81は、サスカイト製の剥片。82は、サスカイト製の凸基式石鎌。83～85は、粘板岩製。83は、石剣または石庭丁の破片。両面は丁寧に研磨される。84と85は、石庭丁。

4 まとめ

今回の調査は、小面積にもかかわらず開析谷の落ち込みから多量の遺物が出土した。周辺が宅地と道路に整備されるなか、島状に残された本地点は旧地形ごと削平されずに温存されたようである。道路拡幅に伴う一連の調査については、各報告書のほかに、同第27集の「まとめ」で周辺地域の調査成果がまとめられているので参照されたい。

本地点の遺物は、主に弥生時代から古墳時代、飛鳥時代の遺物が混在する状況であったが、各々の遺物は比較的破片が大きく、摩滅したものは意外と少なかった。これは遺跡が近くに営まれたことを想起させる。中でも注目されるのは、古墳時代から飛鳥時代の遺物が多い点である。すでに指摘されている通り、前期の古墳の存在はより確実なものとなり、開析谷や氾濫原を見下ろす低位段丘に造営された可能性があろう。一方、飛鳥時代の土器群は郡名寺院である乙訓寺の創建（白鳳時代）以前のものであり、当時の遺跡の状況を明らかにするための資料となる。長岡京の条坊は、乙訓寺の周辺では確認されているが、本地点については開析谷と低位段丘の変わり目に当たることから条坊路の施工は困難であったと考えられる（第21図）。



第21図 調査地周辺の地形条件と条坊想定図（1/2000）

注1) 田辺昭三「陶邑古窯跡群I」平安学園考古学クラブ 1966年

2) 川西宏幸「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」64-2 1978年

3) 中島皆夫「右京第716次調査概要」「長岡京市センター報告書」第23集 2001年

中島皆夫「右京第732次調査概要」「長岡京市センター報告書」第27集 2003年

中島皆夫「右京第740次調査概要」「長岡京市センター報告書」第27集 2003年

原 秀樹「右京第777次調査概要」「長岡京市センター報告書」第37集 2004年

原 秀樹「右京第784次調査概要」「長岡京市センター報告書」第37集 2004年

原 秀樹「右京第792次調査概要」「長岡京市センター報告書」第37集 2004年

付表-1 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	長岡市埋蔵文化財調査報告書
副書名	
シリーズ名	長岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第47集
編著者名	原秀樹
編集機関	財団法人 長岡市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡市奥海印寺東条10-1

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡 今里遺跡	長岡市今里 二丁目41-10他	26209	107 32	34°55'54"	135°41'40"	20061025 20061119	63m ²	道路拡幅 工事
長岡京跡 今里遺跡	長岡市今里 二丁目1、2	26209	107 32	34°55'54"	135°41'32"	20070312 20070427	101m ²	道路拡幅 工事

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡（右京第839次） 今里遺跡	都城 集落	長岡京期 旧石器～江戸	旧流跡跡	弥生土器、土師器、須恵器、 縄釉陶器、黒色土器、瓦器、 埴輪、瓦	
長岡京跡（右京第898次） 今里遺跡	都城 集落	長岡京期 旧石器～江戸	開析谷の落ち込み	弥生土器、石斧丁、土師器、 須恵器、埴輪、陶磁器、瓦	

緯度、経度の測点は、各調査区の中央部である。また、国土座標値は、旧国土座標系を使用している。

図 版

長岡京跡右京第839次調査

図版一



調査地全景（南東から）

長岡京跡右京第839次調査

図版二



(1) 調査地全景（南西から）



(2) 流路の断面（西から）

長岡京跡右京第898次調査

図版三



(1) 調査地近景（北東から）



(2) 調査地近景（西から）



(3) 1トレンチ調査前の状況（西から）



(4) 2トレンチ調査前の状況（東から）



(5) 2トレンチ作業風景（東から）

長岡京跡右京第898次調査

図版四



(一) 一ノ門入寺跡 (西から)



(二) 一ノ門入寺跡 (東から)

長岡京跡右京第898次調査

図版五



(1) 1 トレンチ落ち込みの崖面（北から）



(2) 1 トレンチ落ち込みの崖面（北東から）



(3) 2 トレンチ砂礫層の検出状況（西から）



(4) 2 トレンチ砂礫層の検出状況（東から）

長岡京跡右京第898次調査

図版六



(1) 2トレンチ完掘状況（西から）



(2) 2トレンチ完掘状況（東から）



(3) 2トレンチ南壁（北東から）



(4) 2トレンチ南壁（北西から）

長岡京跡右京第898次調査

図版七



(1) 2 トレンチ落ち込みの崖面と堆積層（西から）



(2) 2 トレンチ落ち込みの崖面と堆積層（北西から）

長岡京跡右京第898次調査

図版八



(1) 2 トレンチ落ち込みの断面（北東から）



(2) 2 トレンチ落ち込みの掘り下げ作業（北東から）



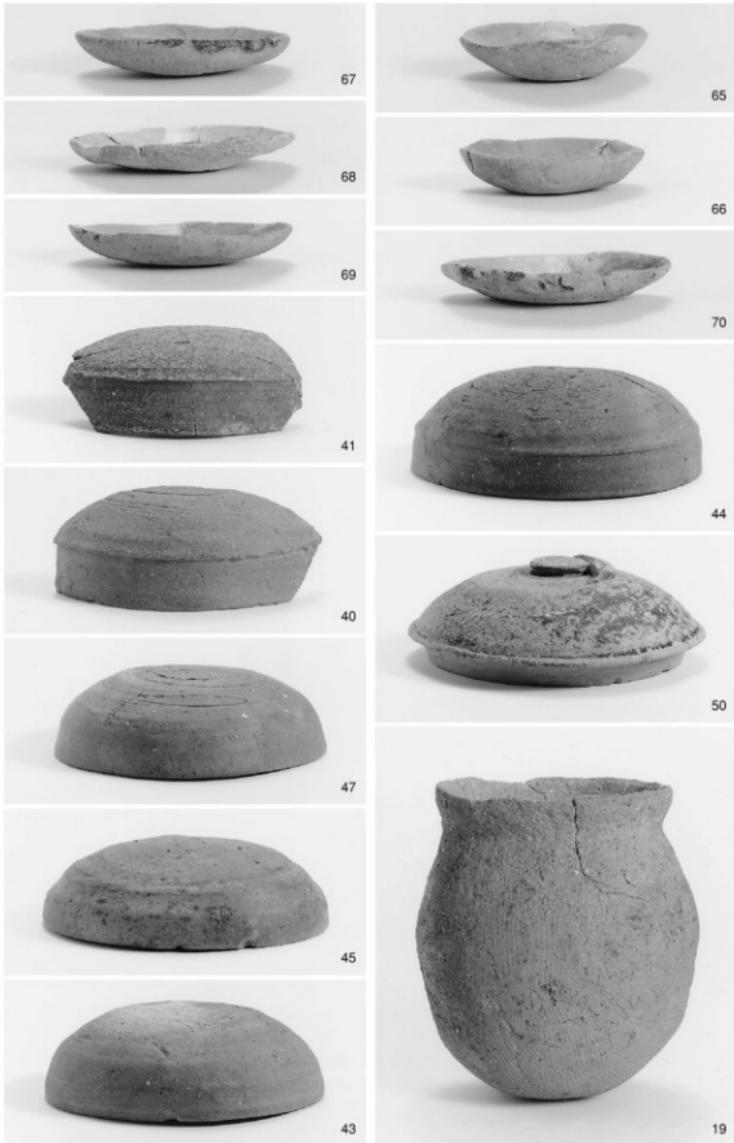
(3) 3 トレンチ全景（北東から）



(4) 3 トレンチ落ち込みの崖面（北から）

長岡京跡右京第898次調査

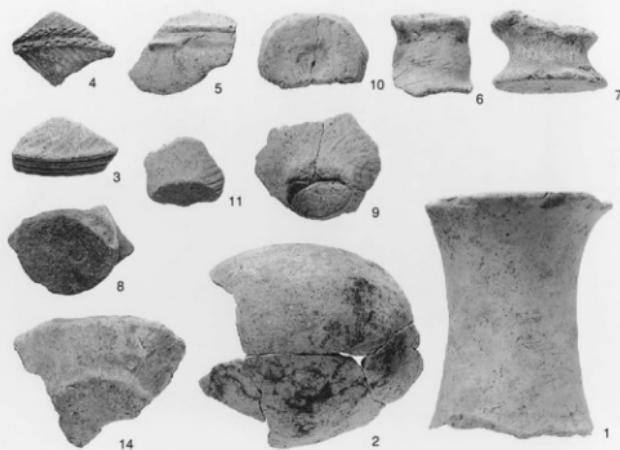
図版九



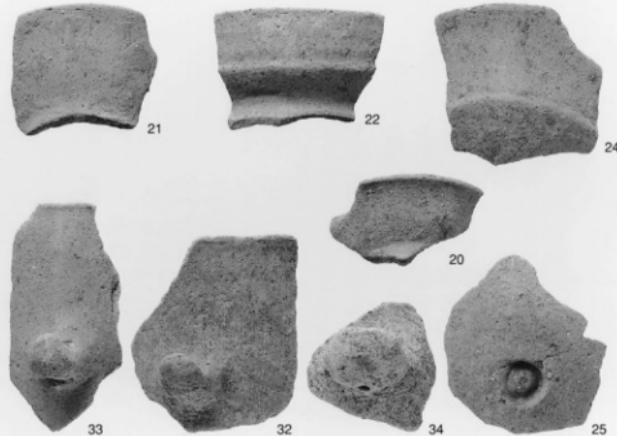
落ち込み出土の土師器と須恵器

長岡京跡右京第898次調査

図版一〇



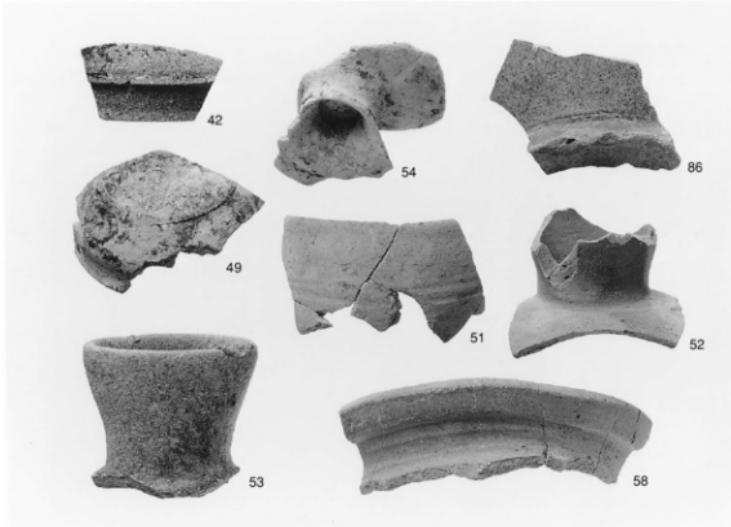
(1) 落ち込み出土の弥生土器



(2) 同古墳時代の土師器

長岡京跡右京第898次調査

図版
一



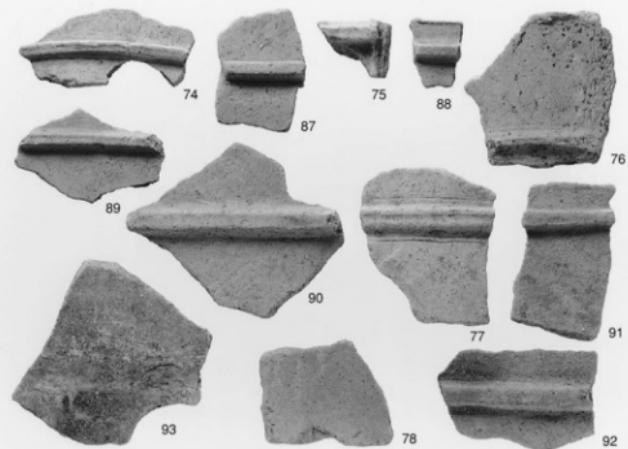
(1) 落ち込み出土の古墳時代の須恵器



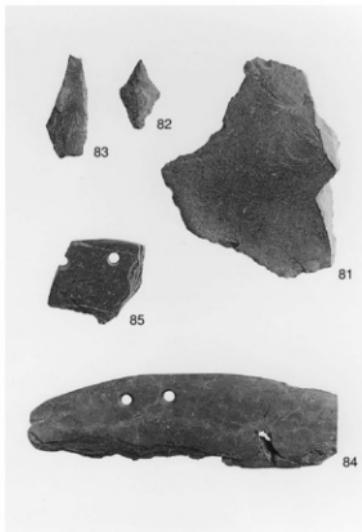
(2) 同須恵器甕

長岡京跡右京第898次調査

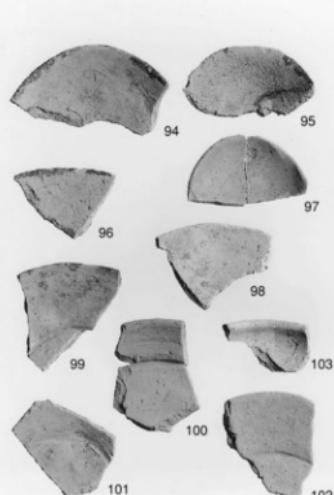
図版
一二



(1) 落ち込み出土の墳輪



(2) 同石器



(3) 同江戸時代の土師器皿と土師質椀

長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第47集

平成19(2007)年6月27日 印刷

平成19(2007)年6月29日 発行

編集発行 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

電話 075-955-3622

FAX 075-951-0427

印 刷 山代印刷株式会社

〒602-0062 京都市上京区寺之内通小川西入

電話 075-441-8177~8(代)

FAX 075-441-8179